神戸学院大学心理学研究 2022 年　第 5 巻 第 1 号　pp.9-21

原著論文
Original Article
（査読あり）

記憶検査の成績予測の正確度と認知的失敗傾向の関係
ー改訂版ウエクスラー記憶検査（WMS-R）と 認知的失敗質問紙（CFQ）による検討ー[1]

清水 寛之　神戸学院大学心理学部

Relationships between accuracy of prediction for memory test performance and tendency of cognitive failure: Using the Wechsler Memory Scale-Revised (WMS-R) and the Cognitive Failure Questionnaire (CFQ)

Hiroyuki Shimizu (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

The present study was aimed at the relationships between accuracy of prediction for memory test performance in a laboratory and time perspective in everyday life using the Wechsler Memory Scale-Revised (WMS-R) and the Cognitive Failure Questionnaire (CFQ). Two hundred and fourteen undergraduate and graduate students (18-28 years old) participated in the study. The questionnaire and the standardized memory test were successively administered to each of the participants. They were individually asked to rate 25 items of the CFQ (5 factors) on 5-points scales from “never” to “very often” about how often the specific event has been experienced within recent six months. Subsequently they were also instructed to perform the WMS-R in a formal fashion, except predicting the delayed performance in four subtests (logical memory, visual paired association, verbal paired association and visual reproduction) after performing each immediate test. The results indicated statistically significant negative correlation between the ratings of the factors in CFQ and the prediction of delayed performance in the four subtests of the WMS-R, but there was no other significant correlation. The results were discussed in terms of the meaningful interpretations for the negative or null relation between the accuracy of predictions and tendency of cognitive failure.

Key words: metamemory, memory prediction, tendency of cognitive failure, the Wechsler Memory Scale-Revised (WMS-R), the Cognitive Failure Questionnaire (CFQ).

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2022, Vol.5, No.1, pp.9-21

人は，日常生活のなかで記憶や忘却に関連した問題に直面することがある。たとえば，過去の出来事をうまく思い出せない，ある事柄を間違って覚えている，誰かの名前が出てこない，大事な約束や予定を失念してしまう，といった経験は，人によって頻度に多少の違いはあるにせよ，決してめずらしいことではない。それらは現実的に，友人や家族との円滑な会話，職場や学校での良好な人間関係の維持･促進，職務や学業の効果的遂行などの妨げになるだけでなく，自己の記憶能力に関する不安や不信につながりかねない。日常的に勘違いやうっかりミス，失念などを何度も経験すると，実際の記憶能力の心理学的評価とは別に，認知や記憶に関する自己効力感（self-efficacy）が弱まることは大いに考えられる。

一般に，自己効力感は自らが行為主体であると認識し，自己の行為を統制したうえで外部からの要請に対応できるという確信に関連した概念である（Bandura, 1989, 1997）。自己効力感のなかでも，

1　本研究は，JSPS 科研費 22530803，25380992，17K04510 の助成を受けたものである。本研究の一部は，日本心理学会第86回大会（2022年９月10日）において発表された。

とくに記憶に関する自己効力感は記憶自己効力感（memory self-efficacy）と呼ばれ，さまざまな状況において個人が自らの記憶能力を発揮できるかどうかに関する自己評価であるといえる。これまでの研究によれば，メタ分析では実際の記憶課題成績と記憶自己効力感との間の相関の平均は低いながらも有意であること（r = .15，95％ CI = .13-.17，Q (168) = 228.57, $p < .05$; Beaudoin & Desrichard, 2011），質問紙調査に基づく相関分析では日常生活における個人の認知的失敗傾向と記憶自己効力感との間でそれぞれを構成している因子間の一部で有意な相関が認められること（清水，2019）などが明らかにされている。

清水（2019）は，メタ記憶質問紙（個人のメタ記憶を評価するための自記式の質問紙）の一環として，日常的に認知的失敗をどの程度経験しているのかを調べる認知的失敗質問紙（Cognitive Failures Questionnaire，CFQ；Broadbent, Cooper, FitzGerald, & Parkes, 1982）と，記憶自己効力感の程度を調べる成人メタ記憶尺度（Metamemory in Adulthood questionnaire，MIA；Dixon & Hultsch, 1983; Dixon, Hultsch, & Hertzog, 1988）の両方を同一の個人に与えて回答を求めたところ，自己の記憶能力に関する自己評価が高い者ほど約束事や予定の失敗が少なく，人名の失念・想起困難を経験する頻度が少ないことが示された　さらに，日常生活場面においてどのような認知的失敗であれ，頻繁に失敗を経験している者ほど，記憶能力の低下や減退を自覚しており，自己の記憶能力に対する不安が高いことが示唆された。

こうした認知的失敗傾向の自覚や記憶自己効力感の経験は，さまざまな記憶課題の成績やその予測の確かさにも関連している可能性が考えられる。つまり，全般的に認知的失敗が多く，記憶自己効力感が低い人はそうでない人に比べて，記憶課題の成績を低めに予測し，実際に成績そのものも高くないのかもしれない。このことは個人のメタ記憶の問題と関係している。ここでのメタ記憶とは，特定の記憶課題において記憶方略を使用できることに気づくことや，記憶課題の学習困難度，記憶する個人の状態や能力，使用できる記憶方略の有効性などに関連した事柄についての幅広い知識が含まれており，自己の記憶行動に対してモニタリングを行ったり記憶成績を予測したりする能力や自己の記憶行動のプランニングやコントロール，調整，修正などにかかわる諸能力も含まれている。

本研究は，特定の課題状況における個人のメタ記憶と認知的失敗傾向の関係を調べることを目的としている。日常生活のなかで各種の認知的失敗をどの程度頻繁に経験しているかという自覚と，実際の個人の記憶能力を特徴づける記憶検査場面での課題成績および成績予測の正確度との関係に焦点を当てる。

日常生活における認知的失敗の経験頻度については，これまでの多くの先行研究と同様，前述の CFQ を用いる。CFQは，Broadbent et al.（1982）によって，日常生活場面での一般的な行動遂行にかかわる認知的失敗を調べるために開発されたものである。認知的失敗に関連した出来事を表す記述文の一部（全 25 項目，例えば，「約束を忘れる」）に対して，その相対的出現頻度を過去６カ月の間で「まったくない」から「非常によくある」までの５段階で評定することが求められる。Broadbent et al.（1982）は，CFQによって捉える日常的な認知的失敗行動は下位カテゴリーを設けるのではなく，全 25項目の得点合計が全体的な失敗のしやすさを表すとしている。山田（1999）は，この CFQに，より広範な失敗行動に関する項目を加えて調査を行ったところ，もとの CFQの項目はほぼすべて一つの因子に関連していることを見いだした。しかしながら，その後，清水・高橋・齊藤（2006, 2007）は日本版CFQ（以下，単にCFQという）を作成し，日本の多数の大学生を対象にこの質問紙に対する回答データを収集した。因子分析の結果では，CFQが⒜空間的失敗（場所や位置，方向性に関する認知的失敗行動に関連する），⒝うっかり，ぼんやりの失敗（注意が散漫になる，当該の記憶課題から気がそれてしまうといった状態と関連する），⒞検索失敗（想起時の情報検索失敗に関連する），⒟約束の失敗（相手との約束や自らが決めた事柄の失念と関連する），⒠人名記憶の失敗（人名の記銘や想起に関する失敗に関連する），の５つの下位項目群からなることが示された（ただし，Wallace, Kass, & Stanny（2002）は「記憶」，「注意散漫」，「不手際」，「名前」という４因子を抽出している）。

また，本研究が用いる記憶検査は改訂版ウエクスラー記憶検査（Wechsler Memory Scale-Revised, WMS-R）である。この記憶検査は，オリジナル版が米国で 1945年に開発されたあと，1987年，1997年，2009年に改訂され（e.g., Wechsler, 1945, 1987, 1997, 2009），現在は WMS-IV（第４版）が米国 Pearson社から刊行されている。日本では，1987年の WMS-R（第２版）の日本版が日本文化科学社から 2001年に刊行されている（Wechsler & 杉下，2001；以下ではこの日本版を WMS-Rとよぶ）。WMS-Rは，現在，臨床場面で記憶に問題があると疑われる人たちを対象に実施される代表的な個別式記憶検査である。適用範囲は 16歳０か月～ 74歳 11か月で，認知症をはじめとする種々の疾患の記憶障害を評価するための検査として広く利用されている。13の下位検査（情報と見当識，精神統制，図形の記憶，論理的記憶Ⅰ，視覚性対連合Ⅰ，言語性対連合Ⅰ，視覚性再生Ⅰ，数唱，視覚性記憶範囲，論理的記憶Ⅱ，視覚性対連合Ⅱ，言語性対連合Ⅱ，視覚性再生Ⅱ）の得点に基づいて５つの指標（一般的記憶，言語性記憶，視覚性記憶，注意／集中力，遅延再生）が算出される。そのうち「遅延再生」については，「論理的記憶」，「視覚性対連合」，「言語性対連合」，「視覚性再生」のそれぞれの Iが直

後検査を，IIが遅延検査を表している。「論理的記憶」では，検査者が読み上げる２つの短い物語（それぞれ120字程度）を聞き，そのあと内容を口頭での再生が求められる。「視覚性対連合」では，図形（抽象的線画）と色が結びつけられた６つの対を見て，そのあとに図形だけが呈示され，それと対になっていた色を６色のなかから指さすことが求められる。「言語性対連合」では，８つの単語対（やさしい連合の４対とむずかしい連合の４対）が読み上げられ，そのあとに単語対の一方の単語だけを聞いて，対になっていたもう一方の単語を答えることが求められる。「視覚性再生」では，全部で４つの幾何学図形が１つずつ，それぞれ 10秒間呈示され，図形ごとに描画再生が求められる。

通常の検査手続きでは，直後検査のあと遅延検査が約 30分後に行われることが予告される。本実験では，その遅延検査の予告とともに，遅延成績の予測を実験参加者に求めることにする。

本研究は，メタ記憶と日常記憶との関係を探る総合的研究の一環として，代表的な記憶検査であるWMS-Rにおける遅延検査成績の予測に関するデータを個別的に収集するとともに，認知的失敗傾向を測定する CFQを同一の大学生に与えて回答を求める。それらのデータをもとに，記憶検査の下位検査ごとの課題成績および成績予測の正確度と CFQを構成する因子との間の相関関係を明らかにすることで，実験室場面での記憶検査課題成績に関する自己評価と日常生活における認知的失敗傾向との関係を検討する。

方　法

実験参加者

近畿地方の４年制大学に在籍する学部学生と大学院学生，合わせて 214名が本調査に参加した。そのうち男性が 93名，女性が 121名であった。実験参加者全体の年齢は，平均 20.66歳（標準偏差 1.40，範囲18-28歳）であった。

実験期間

実験は 2012年３～８月と 2015年５月～ 2016年２月の２つの時期に分けて行われた。

実験場所

実験は，当該大学構内にある認知心理学実験室で行われた。

記憶検査

個人の記憶能力を調べるための代表的な個別式記憶検査として，日本語版の WMS-Rが用いられた。この検査は前述のとおり，13の下位検査から構成されているが，そのうち「情報と見当識」については，実験参加者が健常大学生であり，あとの指標得点の算出には用いられないことから，質問項目の一部（「今日は何曜日ですか？」など）の実施が割愛された。これらの下位検査の得点に基づいて５つの指標（一般的記憶，言語性記憶，視覚性記憶，注意／集中力，遅延再生）が算出される。このなかの遅延検査にかかわる検査項目について直後検査の時点で遅延検査の成績を予測するのに利用した。

質問紙

日常生活場面における認知的失敗行動に関する個人の自己評価を調べるためのメタ記憶質問紙としてCFQが用いられた。日常場面での認知的失敗に関連した出来事を表す記述文の一部（全25項目）に対して，その出現頻度を過去６か月の間で「まったくない」から「非常によくある」までの５段階で評定することが求められた。

実験手続き

記憶検査と質問紙調査は，総合的なメタ記憶に関する研究の一環として，他の実験や検査，別の質問紙調査とともに，同一の実験参加者に対して個別的に行われた。実験参加者は，最初に全体的説明を受け，本研究への参加に関する同意書への署名が求められた。次に，実験・検査・調査が行われ，そのあとに参加協力への謝金の支払いに関する事務手続きが行われた。謝金の金額は実験参加者一人あたり 1600円（所得税を含む）であった。実験参加者がすべての検査と調査に対して落ち着いて取り組めるように配慮がなされた。どの実験参加者に対しても，CFQが与えられたあと，10～ 15分程度の休憩時間を置いてからWMS-Rが実施された。

WMS-Rは，記憶検査や知能検査の実施経験の豊富な実験者及び実験補助者によって，検査マニュアル『日本版ウエクスラー記憶検査法』（Wechsler & 杉下，2001；以下，マニュアルと呼ぶ）に従って行われた。ただし，13の下位検査のうち，「論理的記憶Ⅰ」，「視覚性対連合Ⅰ」，「言語性対連合Ⅰ」，「視覚性再生Ⅰ」については，それぞれの下位検査のあとに，後続のそれぞれの遅延検査（論理的記憶Ⅱ，視覚性対連合Ⅱ，言語性対連合Ⅱ，視覚性再生Ⅱ）が約 30分後に行われることが予告され，さらに，その遅延検査において完全正答を 100％とした場合に，およそ何％くらいの成績をあげることができるのかの予測が求められた。この記憶検査に要する時間は，約45分であった。

CFQは自己ペースで回答することが求められた。この調査に要する時間は５分程度であった。

分析方法

本研究におけるすべてのデータは，表計算ソフトウエア Microsoft Office Excel 2019によって集計・整理され，統計的分析は統計解析ソフトウエア IBM SPSS Statistics 28によって行われた。

WMS-Rでは，専用の記録用紙（Wechsler & 杉下，2001，2001）に 13の下位検査ごとの反応を記録し，マニュアルに従って粗点が算出された。下位検査ごとの粗点は所定の重みづけがなされ，それらの重みづけられた粗点をいくつか組み合わせて合成得点を算出した。その合成得点から，年齢群別の指標得点への換算表に基づいて「一般的記憶」，「言語性記憶」，「視覚性記憶」，「注意／集中力」，「遅延再生」という５つの指標得点が算出された。「一般的記憶」の指標得点は，「言語性記憶」と「視覚性記憶」の各合成得点を加算した得点に基づいて算出された。「言語性記憶」は「論理的記憶Ｉ」と「言語性対連合Ｉ」の２つの下位検査の粗点をもとに，「視覚性記憶」は「図形の記憶」，「視覚性対連合Ｉ」，「視覚性再生Ｉ」の３つの下位検査の粗点をもとに合成得点が算出された。「注意／集中力」は，「精神統制」，「数唱」，「視覚性記憶範囲」の３つの下位検査の粗点をもとに合成得点が算出された。「遅延再生」では，「論理的記憶Ⅱ」，「視覚性対連合」，「言語性対連合Ⅱ」，「視覚性再生Ⅱ」の４つの下位検査の粗点をもとに合成得点が算出された。

CFQについては，過去６カ月の間で「まったくない」から「非常によくある」の５段階の評定反応に対して，順に０～４の点数が与えられて得点化された。CFQの得点が高いほど認知的失敗行動の出現頻度が高く，調査参加者は認知・記憶に関する失敗傾向や問題行動をより頻繁に確実に経験していると評価していることを示す。

倫理的配慮

本研究は，筆者の所属する神戸学院大学の「ヒトを対象とする研究等倫理委員会」に対して事前審査を申請し，2010年 12月と 2013年７月に承認を受けた（承認番号 HEB101207-2，HEB130619-1）。研究調査に先立って，すべての参加者に対して，研究参加に関するさまざまな権利を保障する文書を示し，そうした理解のうえで本研究への参加協力に同意する文書を研究者（筆者）との間で取り交わした。そのなかで，⑴実験等への参加は，個人の自由意思によるもので，参加しなくても不利益を受けないこと（授業科目の単位認定や成績評価とも関係しないこと），⑵実験等の開始後も，いつでも自由に中断・辞退でき，その場合も不利益を受けないこと，⑶実験等の途中または終了後に本実験に関して疑問が生じたときは，すぐに連絡し，適切な対応・措置が受けられること，⑷本研究によって得られたデータは統計処理を加えたうえで学術雑誌などに公表されることがあるが，その場合も参加者の個人情報は厳格に保護され，個人を特定し得る情報は公表されないこと，が記載されていた。これらについて，研究者（筆者）と調査参加者の両者の署名入りの同一の同意書が２通作成され，双方が１通ずつ保管するという手続きがとられた。

結　果

改訂版ウエクスラー記憶検査（WMS-R）の結果

下位検査の粗点と指標得点　WMS-R における下位検査ごとの粗点を，標準化標本のデータとともに Table 1 に示す。いずれの下位検査成績も指標得点も，この検査が標準化された際の標本データ（標準データ）よりもやや高そうであるが，下位検査ごとに t

Table 1　改訂版ウエクスラー記憶検査（WMS-R）における下位検査の粗点

下位検査	本研究 (N = 214) 平均	標準偏差	標準化標本 (N = 54) 平均	標準偏差	t 値	有意水準
情報と見当識	---	---	13.5	0.7	---	---
精神統制	5.28	0.82	5.4	0.8	1.002	*n.s.*
図形の記憶	8.44	1.17	7.8	1.2	3.564	p < .01
論理的記憶Ⅰ	30.64	6.41	26.6	6.4	4.143	p < .001
視覚性対連合Ⅰ	16.78	1.96	15.6	2.2	3.843	p < .001
言語性対連合Ⅰ	22.28	1.70	21.7	2.2	2.100	p < .05
視覚性再生Ⅰ	39.69	1.47	38.9	2.5	3.000	p < .01
数唱	15.85	3.08	17	3.8	2.340	p < .05
視覚性記憶範囲	19.19	3.07	19.1	3.3	0.193	*n.s.*
論理的記憶Ⅱ	26.99	7.17	22.8	6.7	3.886	p < .001
視覚性対連合Ⅱ	5.93	0.38	5.7	0.8	3.116	p < .01
言語性対連合Ⅱ	7.89	0.38	7.8	0.9	1.092	*n.s.*
視覚性再生Ⅱ	38.11	3.65	36.9	4.7	2.044	p < .05

注）標準化標本は、杉下（2001）の年齢群20-24による。
本研究において下位検査「情報と見当識」は割愛された。

Table 2　改訂版ウエクスラー記憶検査（WMS-R）における指標得点

	本研究 (N = 214)		標準化標本 (N = 54)			
下位検査	平均	標準偏差	平均	標準偏差	t 値	有意水準
一般的記憶	110.78	14.16	100.2	14.6	4.874	p < .001
言語性記憶	110.00	14.16	100.1	14.7	4.556	p < .001
視覚性記憶	107.40	9.90	99.6	11.8	4.970	p < .001
注意／集中力	98.20	12.62	100.3	14.7	1.055	*n.s.*
遅延再生	109.94	13.16	100.5	13.9	4.659	p < .001

注）標準化標本は、杉下（2001）の年齢群20-24による。

検定を行うと,「精神統制」,「視覚性記憶範囲」,「言語性対連合Ⅱ」の３つの下位検査において本研究の検査成績は，標準データとの間に有意差は認められなかった。「数唱」では本研究の検査成績は標準データよりも有意に低かったが，それら以外はいずれも有意に標準データよりも高かった。指標得点では「注意／集中力」において本研究の検査成績は標準データとの間に有意差は認められなかったが，それら以外はいずれも有意に標準データよりも高かった。

直後成績と遅延成績　下位検査のなかで直後検査と遅延検査の両方が設けられている「論理的記憶」,「視覚性対連合」,「言語性対連合」,「視覚性再生」の４つの下位検査においてそれぞれの直後成績と遅延成績を％に換算し，Figure 1 に示す。これらについて実験参加者内２要因分散分析を行ったところ，直後成績と遅延成績の違いによる主効果は認められず［F > 1, n.s.］，下位検査の主効果と両方の交互作用はいずれも有意であった［それぞれ，F (1.95, 415.65) = 1421.19, p < .001, η_p^2 = .87; F (2.82, 600.05) = 157.54, p < .001, η_p^2 =.43］。そこで，下位検査ごとに直後成績と遅延成績を比較すると,「論理的記憶」と「視覚性再生」では直後成績のほうが遅延成績よりも有意に高かったが［それぞれ，t (213) = 17.38, p < .001, d = .52; t (213) = 7.32, p < .001, d = .49］,「視覚性対連合」と「言語性対連合」では逆に，遅延成績のほうが直後成績よりも有意に高かった［それぞれ, t (213) = 8.58, p < .001, d = .61; t (213) = 11.91, p < .001, d = .93］。ただし,「論理的記憶」以外の３つの下位検査の直後成績と遅延成績はいずれも 90％を超えており，天井効果が認められた。

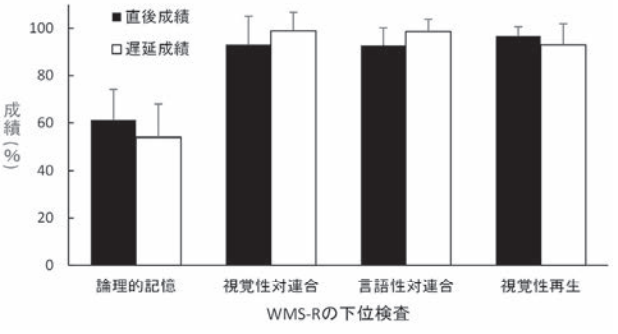

Figure 1
改訂版ウエクスラー記憶検査の直後成績と遅延成績
（ともに％換算済み）（エラーバーは１標準偏差）

遅延成績の予測　上記の４つの下位検査における遅延再生の予測値を Figure 2 に示す。実験参加者内１要因分散分析を行ったところ，下位検査の効果が有意であった［F (2.83, 600.95) = 201.88, p < .001, η_p^2 =.49］。下位検査は,「視覚性対連合」の予測値が最も高く，次いで「言語性対連合」,「視覚性再生」の順で低くなり,「論理的記憶」が最も低かった。これら下位検査間の差はいずれも有意であった［ps < .001］。また，下位検査のそれぞれについて遅延検査での実際の成績と予測された成績を比較すると，いずれの下位検査においても遅延成績予測のほうが実際に遅延成績よりも有意に低かった［「論理的記憶」から順に，t (213) = 16.62, 19.58, 27.47, 29.00, いずれも ps < .001，d = 1.22, 1.47, 2.66, 2.69］。したがって，遅延成績の予測は，下位検査の種類に関係なく，実際の遅延成績に対して明らかに過小予測であることが示された。

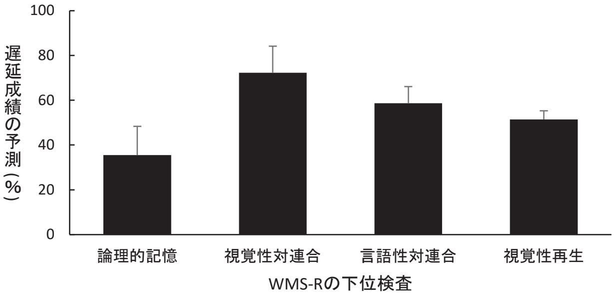

Figure 2
改訂版ウエクスラー記憶検査（WMS-R）の遅延成績の予測
（エラーバーは１標準偏差）

遅延成績の予測の正確度　上記の４つの下位検査において実験参加者ごとに遅延成績から遅延再生予測を減じたものを算出して遅延成績の予測の正確度に関する指標とし，Figure 3 に示す。この場合，値が 0 に近いほど予測は正確であることを示す。これに対して実験参加者内１要因分散分析を行ったところ，下位検査の効果が有意であった［F (2.88, 611.17)

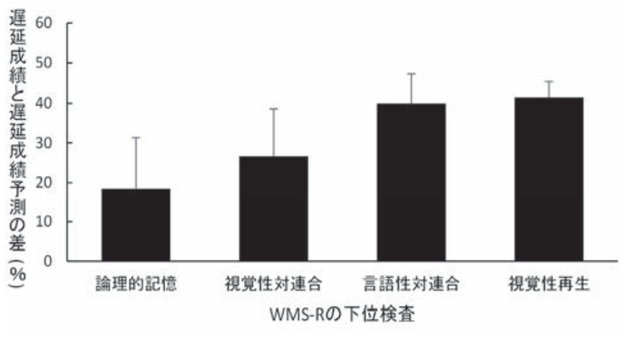

Figure 3
改訂版ウエクスラー記憶検査（WMS-R）の遅延成績と遅延成績予測の差
（エラーバーは 1 標準偏差）

$= 99.20, p < .001, \eta_p^2 = .32$]。遅延成績と遅延成績予測との差は，「論理的記憶」が最も小さく［$p < .001$］，次に「視覚性対連合」が小さく［$p < .001$］，「言語性対連合」と「視覚性再生」はそれらよりも有意に大きかったが［$p < .001$］，この両者に有意差は認められなかった［*n.s.*］。

認知的失敗質問紙（CFQ）の結果 [2]

CFQの 25項目のそれぞれに対する全調査参加者の評定値について，平均と標準偏差を算出した結果を Table 3に示す。質問項目全体の評定値の平均は 1.89（標準偏差 1.14）であった。したがって，この質問紙に記載されている，日常生活場面での個々の認知的失敗については，平均して「過去６カ月の間で，とき

Table 3　認知的失敗質問紙（CFQ) の質問項目と評定値

番号	質 問 項 目	平均	標準偏差
1	本などをよく考えないで読み過ごしてしまったために，もう一度読み直さなければならない	2.20	0.96
2	家の中を歩いてきて，何をするためにそこに来たのか思い出せない	2.02	0.96
3	道路に出ている看板や標識に気がつかない	1.77	1.02
4	方向を説明するとき，右と左を間違う	1.23	1.13
5	人にぶつかる	1.21	0.99
6	出かける時，明かりや火を消したか，鍵をかけたかどうか思い出せない	1.93	1.00
7	人と会った時，その人の名前を聞きのがす	2.09	1.04
8	失礼なことを言ったかもしれないと，後になって気付く	2.46	1.01
9	何かをしている時に話しかけられると聞きのがす	2.65	0.93
10	かんしゃくを起こして後悔する	1.48	1.13
11	大事な手紙に何日も返事を書かない	1.53	1.11
12	よく知っていてもめったに通らない道に出るには，どこで曲がればいいのか思い出せない	1.64	1.16
13	スーパーマーケットに行って，欲しい品物が目の前にあるのに見つけられない	1.43	0.98
14	正しい意味で言葉を使っているかどうかが，急に気になる	2.13	0.97
15	決心するまであれこれ迷う	2.78	1.09
16	約束を忘れる	1.17	0.85
17	新聞や本をどこに置いたか思い出せない	1.95	0.99
18	例えば捨てようと思っていた包み紙を残して，チョコレートの方をうっかり捨ててしまう	0.89	0.89
19	何かを聞いていなければならない時にぼんやり空想してしまう	2.62	0.98
20	人の名前を思い出せない	2.08	1.11
21	家の中で何かに取りかかっている時につい他の事がしたくなってしまう	2.77	0.96
22	のどまで出かかっているのに，どうしても思い出せない	2.38	0.85
23	何を買いにその店まで来たかが，思い出せない	1.10	1.00
24	物を落とす	1.56	1.08
25	言おうとしていたことを思い出せない	2.30	0.84
	全　体	1.89	1.14

注）評定反応から評定値への数値変換（得点化）は以下のとおりである。
過去６カ月の間で，まったくない＝0
過去６カ月の間で，めったにない＝1
過去６カ月の間で，ときどきある＝2
過去６カ月の間で，かなりよくある＝3
過去６カ月の間で，非常によくある＝4

2　本研究の CFQ の結果については，すでに清水（2019）で発表している。

どきある」といった程度の頻度で経験されていることが示された。質問項目によって平均評定値は，かなりばらつきが見られるものの，平均評定値が 3.00 を超える項目はなかった。すなわち，全体として，質問項目のなかに「過去６カ月の間で，かなりよくある」または「過去６カ月の間で，非常によくある」といった高頻度で経験される行動記述文は含まれていなかった。

清水他（2006, 2007）の研究結果に基づいて，調査参加者ごとに各因子別の評定値の α係数，平均および標準偏差を算出し，Table 4に示す。いずれの下位尺度もほぼ十分な信頼性をもつことが示された。試みに因子間の平均評定値を比べると，全体として因子の主効果の有意性が認められた［F (4, 852) = 140.64, p < .001, η_p^2 = .398］。因子間での平均評定値の差をBonferroniの多重比較によって検定したところ，平均

Table 4　認知的失敗質問紙（CFQ）の因子（下位尺度）ごとの α 係数，平均および標準偏差

因子（下位尺度）	質問項目数	該当する質問項目の番号	α 係数	平均	標準偏差
空間的失敗	6	4, 12, 3, 13, 18, 5	.682	1.36	0.64
うっかり、ぼんやりの失敗	8	8, 21, 15, 19, 9, 14, 1, 10	.745	2.39	0.60
検索失敗	2	22, 25	.764	2.34	0.76
約束の失敗	3	16, 17, 11	.518	1.55	0.70
人名記憶の失敗	2	7, 20	.715	2.09	0.95
全 体	21		.864	1.95	0.73

注）各因子に対応する質問項目は因子負荷量0.35以上の項目だけを採用した。
質問項目の番号は因子負荷量の大きい項目から順に示す。
詳細は清水他（2006, 2007）を参照。

Table 5　WMS-R の成績・予測と CFQ の因子別項目評定値との相関

	CFQの因子				
WMS-R	空間的失敗	うっかり，ぼんやりの失敗	検索失敗	約束の失敗	人名記憶の失敗
指標得点					
一般的記憶	-.017	-.108	-.094	.030	-.022
言語性記憶	-.009	-.092	-.099	.040	-.012
視覚性記憶	-.053	-.117	-.038	-.035	-.062
注意／集中力	-.125	-.098	-.029	-.074	-.025
遅延再生	-.034	-.155*	-.156*	-.013	-.029
直後成績					
論理的記憶	-.001	-.083	-.093	.044	-.009
視覚性対連合	-.067	-.109	-.032	.020	-.022
言語性対連合	-.076	-.120	-.099	-.024	-.020
視覚性再生	-.001	-.054	-.036	-.072	-.032
遅延成績					
論理的記憶	.006	-.123	-.104	.041	-.045
視覚性対連合	-.086	-.206**	-.076	-.063	.003
言語性対連合	-.020	-.012	-.061	-.053	.008
視覚性再生	-.050	-.049	-.130	-.061	.055
遅延成績予測					
論理的記憶	-.168*	-.228**	-.248**	-.158*	-.120
視覚性対連合	-.122	-.146*	-.084	-.064	-.032
言語性対連合	-.148*	-.111	-.184**	-.029	-.125
視覚性再生	-.122	-.089	-.042	-.049	-.053
遅延成績と遅延成績予測との差					
論理的記憶	.170*	.116	.152*	.192**	.078
視覚性対連合	.106	.093	.067	.049	.036
言語性対連合	.140*	.105	.165*	.016	.124
視覚性再生	.094	.062	-.016	.020	.073

* p < .05,　** p < .01

評定値は「うっかり，ぼんやりの失敗」と「検索失敗」がともに高く，それらに続いて「人名記憶の失敗」，「約束の失敗」，「空間的失敗」の順に低かった［いずれも *p*s < .05］。

改訂版ウエクスラー記憶検査（WMS-R）の成績・予測と認知的失敗質問紙（CFQ）の因子別項目評定値との相関

WMS-Rの５つの指標得点，４つの下位検査における直後成績，遅延成績，遅延成績予測および遅延成績予測の正確度に関する各指標と，CFQの５因子における因子別平均評定値との間の相関係数を算出し，Table 5に示す。有意水準５％以下の相関を示す部分を中心に見ていくと，両者の相関はおよそ次のようになる。すなわち，(a)個人の記憶能力を示すWMS-Rの指標得点については「遅延再生」のみ，CFQの「うっかり，ぼんやりの失敗」および「検索失敗」との間に有意な負の相関が見られた。(b) WMS-Rの直後成績では，いずれの下位検査ともにCFQの因子別評定値との間で有意な相関は見られなかった。(c) WMS-Rの遅延成績では「視覚性対連合」とCFQの「うっかり，ぼんやりの失敗」との間でのみ有意な負の相関が見られた。(d) WMS-Rの遅延成績予測では，「論理的記憶」はCFQの「人名記憶の失敗」以外の４因子との間ですべて有意な負の相関が見られた。「視覚性対連合」はCFQの「うっかり，ぼんやりの失敗」との間でのみ有意な負の相関が見られた。「言語性対連合」は「空間的失敗」および「検索失敗」との間でそれぞれ有意な負の相関が見られた。「視覚性再生」はいずれのCFQの因子とも相関は認められなかった。(e) WMS-Rにおける遅延成績と遅延成績予測との差については，「論理的記憶」とCFQの「空間的失敗」，「検索失敗」，「約束の失敗」との間でそれぞれ有意な正の相関が見られた。また，「言語性対連合」は「空間的失敗」との間，および「検索失敗」との間でそれぞれ有意な正の相関が見られた。

WMS-Rでの成績予測の正確度とCFQでの認知的失敗傾向との関係に関するG-P分析の結果

WMS-Rの指標得点とCFQの因子別評定値との関係をより詳細に調べるために，２つのG-P分析を行った。はじめに，CFQの因子別に相対的に平均評定値の高い実験参加者（認知的失敗を比較的多く経験している者）と低い実験参加者（認知的失敗の経験が比較的少ない者）を抽出し，WMS-Rの各指標得点について両者を比較した。因子ごとに平均評定値がおよそ上位30％と下位30％の範囲内にいる実験参加者をそれぞれ上位群，下位群として設定した（因子別平均評定値が同一の値をとる者がいたため因子ごとの各群の人数は異なる）。こうしたCFQの因子別平均評定値の上位群と下位群においてWMS-Rの指標得点を比較した結果をTable 6に示す。

Table 6では，(a) WMS-Rの指標得点については「遅延再生」でのみ，CFQの「検索失敗」の平均評定値の上位群が下位群よりも成績だけが有意に低く，他に有意差は見られなかった。(b) WMS-Rの直後成績では，「言語性対連合」でのみCFQの「空間的失敗」の平均評定値の上位群が下位群よりも成績が有意に低かった。(c) WMS-Rの遅延成績では，「視覚性再生」でのみCFQの「空間的失敗」の上位群が下位群よりも成績が有意に高かった。(d) WMS-Rの遅延成績予測では，「論理的記憶」はCFQの「人名記憶の失敗」以外の４因子において上位群は下位群よりもいずれも有意に予測値が低かった。また，「言語性対連合」ではCFQの「検索失敗」の上位群は下位群よりも有意に予測値が低かった。(e) WMS-Rにおける遅延成績と遅延成績予測との差については，「論理的記憶」において「空間的失敗」の上位群が下位群よりも，「言語性対連合」において「検索失敗」の上位群が下位群よりも，それぞれ有意に高く，それら以外は，上位群と下位群との間に有意差は認められなかった。

次に，WMS-Rの遅延成績の遅延成績予測との差に注目し，これについて相対的に大きな値を示す実験参加者（遅延成績の予測が比較的正確でない者）と小さな値を示す実験参加者（遅延成績の予測が比較的正確である者）を抽出し，CFQの因子別平均評定値について両者を比較した。遅延成績と遅延成績予測との差の値がおよそ上位30％と下位30％の範囲内にいる実験参加者をそれぞれ上位群，下位群として設定した（同一の値をとる者がいたため下位検査ごとの各群の人数は異なる）。こうしたWMS-Rでの遅延成績と遅延成績予測との差に関する上位群と下位群においてCFQの因子別平均評定値を比較した結果をTable 7に示す。

Table 7では，(a)「論理的記憶」の上位群は下位群よりもCFQの「検索失敗」と「約束の失敗」の平均評定値が有意に高かった。(b)「視覚性対連合」の上位群は下位群よりもCFQの「空間的失敗」の平均評定値が有意に高かった。(c)「言語性対連合」の上位群は下位群よりもCFQの「空間的失敗」と「検索失敗」の平均評定値が有意に高かった。(d)「視覚性再生」については，いずれのCFQ因子においても上位群と下位群の間に平均評定値の差は見られなかった。

考　察

本研究は，標準化された記憶検査課題における成績予測の正確さと日常生活場面における認知的失敗傾向との関係を明らかにするために，大学生214名を対象に，WMS-RとCFQの両方を実施した。WMS-Rについては，直後検査のあとに遅延検査成績の予測を求め，下位検査ごとに直後成績と遅延成績だけでなく，遅延成績の予測値とCFQの因子別評定値との相関関係について分析を行った。

Table 6　CFQ の各因子別平均評定値の上位群と下位群における WMS-R の成績・予測の比較

	CFQの因子																			
	空間的失敗				うっかり，ぼんやりの失敗				検索失敗				約束の失敗				人名記憶の失敗			
WMS-R	上位群 (*n*=77)	下位群 (*n*=76)	*t*値	有意水準	上位群 (*n*=70)	下位群 (*n*=65)	*t*値	有意水準	上位群 (*n*=66)	下位群 (*n*=38)	*t*値	有意水準	上位群 (*n*=69)	下位群 (*n*=60)	*t*値	有意水準	上位群 (*n*=85)	下位群 (*n*=78)	*t*値	有意水準
指標得点																				
一般的記憶	109.61	110.76	0.513	*n.s.*	109.39	111.75	0.985	*n.s.*	110.35	112.92	0.877	*n.s.*	111.70	111.03	0.264	*n.s.*	110.22	110.83	0.270	*n.s.*
言語性記憶	108.84	109.78	0.417	*n.s.*	108.89	110.94	0.853	*n.s.*	109.14	111.66	0.828	*n.s.*	110.93	110.02	0.357	*n.s.*	109.53	110.10	0.258	*n.s.*
視覚性記憶	106.75	107.95	0.743	*n.s.*	105.91	107.68	1.062	*n.s.*	108.12	109.42	0.809	*n.s.*	107.28	107.97	0.446	*n.s.*	106.79	107.23	0.268	*n.s.*
注意／集中力	95.44	99.58	1.970	*n.s.*	96.66	99.00	1.047	*n.s.*	97.76	98.13	0.145	*n.s.*	97.59	98.93	0.565	*n.s.*	97.32	99.19	0.904	*n.s.*
遅延再生	108.40	110.21	0.873	*n.s.*	107.04	111.32	1.890	*n.s.*	108.08	113.29	2.046	$p < .05$	109.83	110.50	0.286	*n.s.*	109.22	110.27	0.515	*n.s.*
直後成績																				
論理的記憶	60.55	60.95	0.201	*n.s.*	60.40	61.91	0.686	*n.s.*	60.61	62.74	0.769	*n.s.*	62.32	61.30	0.436	*n.s.*	61.06	61.38	0.162	*n.s.*
視覚性対連合	92.64	94.08	0.820	*n.s.*	91.67	94.10	1.355	*n.s.*	93.94	94.88	0.530	*n.s.*	93.64	93.43	0.130	*n.s.*	93.20	92.66	0.304	*n.s.*
言語性対連合	91.40	93.91	2.102	$p < .05$	92.26	93.97	1.441	*n.s.*	92.49	93.75	0.868	*n.s.*	92.45	93.26	0.666	*n.s.*	92.21	92.95	0.650	*n.s.*
視覚性再生	96.58	96.79	0.348	*n.s.*	96.48	96.47	0.013	*n.s.*	96.71	97.30	0.868	*n.s.*	96.64	97.28	1.104	*n.s.*	96.47	96.65	0.303	*n.s.*
遅延成績																				
論理的記憶	53.48	53.82	0.149	*n.s.*	51.74	54.89	1.281	*n.s.*	53.24	55.63	0.796	*n.s.*	54.81	53.63	0.446	*n.s.*	53.20	54.77	0.700	*n.s.*
視覚性対連合	97.62	99.34	1.433	*n.s.*	97.62	100.00	1.930	*n.s.*	98.48	100.00	1.936	*n.s.*	98.31	99.72	1.250	*n.s.*	99.02	98.72	0.286	*n.s.*
言語性対連合	98.05	99.01	1.260	*n.s.*	98.93	98.27	0.805	*n.s.*	98.48	99.67	1.794	*n.s.*	98.73	99.38	0.906	*n.s.*	98.38	98.40	0.018	*n.s.*
視覚性再生	91.83	93.23	0.922	*n.s.*	91.43	93.17	1.046	*n.s.*	91.13	94.99	2.449	$p < .05$	91.98	93.33	0.792	*n.s.*	93.14	92.21	0.664	*n.s.*
遅延成績予測																				
論理的記憶	32.21	39.14	2.808	$p < .05$	29.43	37.54	3.165	$p < .01$	30.83	38.03	2.234	$p < .05$	31.74	37.67	2.123	$p < .05$	32.53	36.99	1.882	*n.s.*
視覚性対連合	69.40	75.79	1.788	*n.s.*	67.70	73.98	1.577	*n.s.*	71.50	73.55	0.495	*n.s.*	70.57	75.42	1.224	*n.s.*	71.18	71.79	0.179	*n.s.*
言語性対連合	55.58	61.97	1.923	*n.s.*	55.79	61.92	1.796	*n.s.*	54.85	64.08	2.338	$p < .05$	56.45	59.67	0.820	*n.s.*	55.29	60.96	1.800	*n.s.*
視覚性再生	50.06	54.43	1.352	*n.s.*	49.57	54.46	1.410	*n.s.*	51.21	55.79	1.124	*n.s.*	50.51	53.83	0.890	*n.s.*	49.82	53.53	1.215	*n.s.*
遅延成績と遅延成績予測との差																				
論理的記憶	21.27	14.67	2.511	$p < .05$	22.31	17.35	1.755	*n.s.*	22.41	17.61	1.453	*n.s.*	23.07	15.97	2.398	*n.s.*	20.67	17.78	1.105	*n.s.*
視覚性対連合	28.22	23.55	1.462	*n.s.*	29.92	26.02	1.068	*n.s.*	26.98	26.45	0.142	*n.s.*	27.74	24.31	0.931	*n.s.*	27.83	26.92	0.285	*n.s.*
言語性対連合	42.47	37.04	1.601	*n.s.*	43.14	36.35	1.922	*n.s.*	43.64	35.59	2.099	$p < .05$	42.28	39.71	0.647	*n.s.*	43.09	37.44	1.744	*n.s.*
視覚性再生	41.76	38.79	0.861	*n.s.*	41.86	38.71	0.851	*n.s.*	39.92	39.20	0.163	*n.s.*	41.47	39.50	0.488	*n.s.*	43.32	38.69	1.468	*n.s.*

そうした分析に先立って，WMS-Rの成績に関する結果（Table 1）によれば，本研究における記憶検査の課題成績は，「情報と見当識」を除く 12の下位検査のうち９つの下位検査において標準データよりも有意に高かった。また同様に，指標得点の「一般的記憶」，「言語性記憶」，および「遅延再生」においても，標準データよりも有意に高かった（Table 2）。したがって，本研究の実験参加者は全体として，WMS-Rが標準化されたときのほぼ同じ年齢層の参加協力者に比べて記憶能力が優れていることを前提に，本研究の結果を捉えておく必要がある。さらに，本研究の場合，一般的な WMS-Rの検査手続きとは異なり，直後検査のあとに遅延検査成績を予測するよう求めた。そのため，こうした予測を求めたこと自体が「論理的記憶Ⅱ」から「視覚性再生Ⅱ」までの４つの下位検査成績および「遅延再生」の遂行に有利に働いた可能性が考えられる。

本研究の結果，記憶検査課題における成績・予測と日常生活場面における認知的失敗傾向との関係に関して，全体として得られた主要な研究知見は，大きく次の４点にまとめることができる。

⑴ WMS-Rの指標得点，直後成績および遅延成績は，全般的に CFQの各因子の平均評定値との間に相関関係はほとんど認められなかった（Table 5）。その一方で，CFQの「うっかり，ぼんやりの失敗」と「検索失敗」は WMS-Rの「遅延再生」の指標得点との間で有意な負の相関が見られた。また，CFQはすべての因子において WMS-Rの直後成績と間に相関が見られず，遅延成績との間でも「うっかり，ぼんやりの失敗」と「視覚性対連合」との間に唯一，有意な負の相関が見られた。

⑵ WMS-Rの遅延成績の予測値は，「論理的記憶」では「人名記憶の失敗」を除く CFQのすべての因子の平均評定値との間で有意な負の相関が見られ，そのほかの下位検査でもいくつかの特定の CFQ因子の平均評定値との間に有意な負の相関が見られた（Table 5）。さらに，遅延成績と遅延成績予測との差では，CFQのいくつかの因子との間に有意な正の相関が見られた。

⑶ CFQ因子の平均評定値における上位群と下位群は，WMS-Rの指標得点，直後成績，遅延成績，遅延成績予測，遅延成績と遅延成績予測との差において，ほとんど有意差は認められなかった（Table 6）。ただし，「人名記憶の失敗」を除くすべての CFQ因子において上位群は下位群よりも WMS-Rの「論理的記憶」の遅延成績予測の値が有意に低かった。また，CFQの「検索失敗」の上位群は下位群よりも，WMS-Rのいくつかの下位検査の指標得点，遅延成績，遅延成績予測において有意に低かったが，遅延成績と遅延成績予測との差については逆に有意に高かった。

Table 7　WMS-R の遅延成績と遅延成績予測の差に関する上位群と下位群における CFQ の因子別平均評定値の比較

	CFQの因子				
WMS-R	空間的失敗	うっかり，ぼんやりの失敗	検索失敗	約束の失敗	人名記憶の失敗
論理的記憶					
上位群（n = 64）	1.39	2.38	2.48	1.56	2.17
下位群（n = 70）	1.20	2.27	2.15	1.30	2.03
t 値	1.688	1.127	2.681	2.180	0.882
有意水準	*n.s.*	*n.s.*	p < .01	p < .05	*n.s.*
視覚性対連合					
上位群（n = 44）	1.50	2.54	2.50	1.62	2.18
下位群（n = 58）	1.26	2.30	2.28	1.44	2.03
t 値	1.990	1.962	1.511	1.311	0.821
有意水準	p < .05	*n.s.*	*n.s.*	*n.s.*	*n.s.*
言語性対連合					
上位群（n = 48）	1.55	2.55	2.60	1.56	2.26
下位群（n = 60）	1.29	2.35	2.29	1.56	1.99
t 値	2.179	1.826	2.059	0.010	1.576
有意水準	p < .05	*n.s.*	p < .05	*n.s.*	*n.s.*
視覚性再生					
上位群（n = 44）	1.48	2.45	2.37	1.48	2.11
下位群（n = 58）	1.29	2.42	2.39	1.51	1.94
t 値	1.582	0.193	0.151	0.187	0.956
有意水準	*n.s.*	*n.s.*	*n.s.*	*n.s.*	*n.s.*

⑷遅延成績と遅延成績予測との差について下位検査ごとに上位群と下位群を設定し，両群を比較すると,「論理的記憶」の上位群は下位群よりもCFQの「検索失敗」と「約束の失敗」の平均評定値が有意に高かった(Table 7)。「視覚性対連合」と「言語性対連合」のそれぞれの上位群は下位群よりもCFQの「空間的失敗」の平均評定値が有意に高く，「言語性対連合」の上位群は下位群よりもCFQの「検索失敗」でも平均評定値が有意に高かった。「視覚性再生」については，いずれのCFQ因子においても上位群と下位群の間に平均評定値の差は見られなかった。

以上の４点を中心に考察を進めていく。上記⑴の分析結果より，全般的にCFQの因子別平均評定値はWMS-Rの直後成績および遅延成績との間にほとんど相関が見られなかった。このことから，日常生活において種々の認知的失敗をどの程度頻繁に経験しているかということと実験室場面での実際の課題成績の高低とはあまり関係していないことが示唆される。Schacter(2001）や清水(2021）が指摘するように，日常生活全般にわたって自覚されるさまざまな失敗の経験頻度と，実験室場面や検査室場面の実際の記憶成績とは必ずしも一致しないことが多い。これまでの研究でも，極端な事例ではあるが，たとえば，全米記憶選手権の優勝者や円周率暗唱の世界記録保持者といった記憶熟達者(memory expert）の研究(e.g., Levinson, 1999; Takahashi, Shimizu, Saito, & Tomoyori, 2006)，写真的記憶(photographic memory）や直観像(eidetic image）に関連したサヴァン症候群(savant syndrome）の研究(e.g., Miller, 1999）は重要な研究知見を提供している。すなわち，限られた範囲内の特定の記憶課題においてきわめてすぐれた成績をおさめる人たちのなかには，日常生活に何の問題も生じていないこともあれば，多くの問題を抱えていることもある。本研究の場合，そうした顕著な記憶特性をもつ人たちを対象とした研究調査ではなかったが，ごく一般的な若年成人においても日常生活での認知的失敗傾向と記憶課題成績とはほとんど関係しないことが確認された。ただし，CFQの「うっかり，ぼんやりの失敗」の傾向は直後成績にはまったく関係しないものの，ごく一部の遅延成績との間に有意な負の相関が見られた。CFQの「検索失敗」の傾向もWMS-Rの指標得点「遅延再生」の成績との間で有意な負の相関が見られた。したがって，全体として認知的失敗傾向と記憶検査の課題成績とは関係しなくても，日常生活で不注意や注意散漫による失敗あるいは想起時での検索困難の傾向は時間遅延を伴う記憶検査課題の成績には関係しているのかもしれない。

一般に，なんらかの原因(ストレスや不安など）によって日常生活場面での自己の認知能力や記憶能力について著しく自信が低下し，失敗を過度に深刻に受けとめ，実際よりも頻繁に失敗が生じたと捉える場合がある。そうした場合において，不注意や注意散漫，集中力の欠如，あるいは想起困難などによって検査課題の成績に全般的に悪影響が現れることは十分考えられる。その一方で，注意や記憶検索に関連した検査課題を除けば，空間認知や展望記憶などの検査課題成績に対する悪影響は比較的軽微で，それらの能力はある一定の水準を保っているという可能性が本研究の結果から示唆される。

上記⑵の研究結果のうち，CFQの「人名記憶の失敗」を除くすべての因子においてWMS-Rの「論理的記憶」の遅延成績予測値との間で有意な負の相関が見られたことは興味深い。前述のとおり，日常生活における認知的失敗の経験頻度は実際の記憶検査の成績との間にほとんど関係が見られなかったにもかかわらず，そうした失敗経験の頻度が多いほど「論理的記憶」の遅延成績を実際よりも明らかに低めに予測していることが示された。ここでの「論理的記憶」という下位検査課題は，検査参加者に対して口頭で読みあげられた120字程度の短い文章をその場で記銘したあと直後再生と遅延再生が求められるというものであった。つまり，文章材料の逐語的な記憶保持の能力が測定される検査課題である。Figure 1に示されたように，この検査課題の成績は明らかに他の３つの下位検査課題よりも相対的に成績水準が低く，検査参加者にとってむずかしい課題であることが推測できる。そのような検査課題において過小予測の傾向は顕著に現れるのかもしれない。このことは，上記⑶の分析結果とも一致する。CFQの因子ごとに認知的失敗の比較的多い者と認知的失敗の比較的少ない者をそれぞれ約30%ずつ抽出して両者を比較すると，明らかに認知的失敗の多い者は少ない者に比べて遅延成績を過小に予測していた(Table 5)。本稿の冒頭で述べたように，CFQとMIAの関係を調べた清水(2019）の調査結果によれば，頻繁に失敗を経験している者ほど，記憶自己効力感に関連した記憶能力の低下や減退を自覚しており，自己の記憶能力に対する不安が高いことが示唆されている。したがって，そうした自己の記憶能力に対する不安が時間遅延を伴う比較的困難な記憶保持の成績を予測する際に影響した可能性が十分に考えられる。

上記⑶の分析結果では，前述のとおり，とくにWMS-Rの「論理的記憶」に関して，全般的に認知的失敗の多い者は少ない者に比べて遅延成績の予測値は有意に低かった。このこと以外に，CFQの「検索失敗」についても失敗経験の多い者は少ない者よりもWMS-Rのいくつかの下位検査の指標得点，遅延成績，遅延成績予測において有意に低かった。遅延成績と遅延成績予測との差については逆に，有意に高かった。このことから想起時の検索失敗を多く経験している者は，その経験の少ない者に比べて，相対的に遅延成績を低めに予測し，結果として成績と予測との差が大きくなり，予測の正確度が低くなることが示された。このことは，本研究で用いたWMS-Rとい

う記憶検査の構造的な特徴に起因するもの（大学生が検査参加者である場合，遅延課題のある下位検査では「論理的記憶」以外のすべての下位検査において直後成績も遅延成績もほぼ天井効果を示す）もあるが，日常生活の認知的失敗の客観的な経験頻度の自覚だけでなく，個人がそうした認知的失敗をどのように主観的に捉えているかが重要なのかもしれない。

比較的最近の研究では，実験室場面において特定の記憶課題で誤った答えを出した（失敗を経験した）直後に正答に関するフィードバックが与えられるとその後の記銘学習が促進されることが示されている（Metcalfe, 2017）。興味深いことに，そうした促進効果は，学習者が自身の誤答が正答であると固く信じていた場合に，より顕著に現れた。さらに，他者がそうした誤答や正答フィードバックを受けている様子を観察しているだけでは促進効果は見られないことなども報告されている（Metcalfe & Xu, 2018）。したがって，日常生活においても自己の認知的失敗の経験頻度の多少だけでなく，自己の主体性に関連して個々の失敗を何に帰属し，どのような教訓を得たと思うかといった認識について検討する必要があると考えられる。

上記⑷の分析結果では，WMS-Rの下位検査ごとに，遅延成績の予測が比較的正確である者と正確でない者を抽出し，両者を比較したところ，主として，WMS-Rの「論理的記憶」において予測正確度の高い者はそうでない者に比べて，日常生活での不注意や注意散漫による失敗の経験頻度が少なく，予定や約束に関する失敗経験も少ないことが示された。逆に言うと，遅延成績を過剰に低く予測し，結果として予測の正確度が低くなっている者ほど，日常生活では種々の認知的失敗を多く経験している可能性が高い。このことは上記⑶の分析結果と一致している。

最後に，すべての相関分析と G-P分析を通じて，CFQの「人名記憶の失敗」の平均評定値と WMS-Rの指標得点，直後成績，遅延成績，遅延生成の予測，遅延成績と遅延成績予測との差のいずれにおいても有意な関係が見られなかったこと，さらにそれに次いで「約束の失敗」においてもそれに近い傾向が見られたことについて触れておきたい。清水他（2006, 2007）は，個人の客観的な記憶能力の優劣とは別に，日常生活場面での記憶能力の自己評価は，大きく「回想記憶」，「展望記憶」，「人名記憶」という３種類に分かれることを報告している。すなわち，(a)特定の知識や過去の出来事を想起すべきときに適切に想起できるかどうか，(b)将来の約束事や予定をきちんと覚えていて遂行することができるかどうか，(c)人の名前を正しく想起できるかどうか，によって個人の記憶能力の自己評価を特徴づけることができる。本研究が用いた CFQの因子では，日常生活での認知的失敗に関連して「検索失敗」が回想記憶に，「約束の失敗」が展望記憶に，「人名記憶の失敗」が人名記憶にほぼ対応していると考えられる。そうすると，少なくとも大学生の実験参加者に関する限り，人名記憶に関する失敗は実験室場面での記憶課題成績やその予測には何ら関連性をもっていないことが示唆される。このことは実験室場面や検査室場面での記憶能力と日常生活場面での記憶能力を考えるうえで重要な示唆を含んでいる。つまり，実験室場面や検査室場面で測定される記憶能力はほとんどが回想記憶に関連するものであり，他者との約束や将来の予定，さらに個人の人間関係に深く結びついた展望記憶や人名記憶はあまり取り扱われていない。したがって，より広範に包括的に個人の記憶能力およびメタ記憶能力を捉えるには，展望記憶や人名記憶に関する検査課題を開発し，その成否や予測の正確度を調べる必要があると考えられる。

利益相反

本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

Bandura, A. (1989). Regulation of cognitive processes through perceived self-efficacy. *Developmental Psychology, 25,* 729-735.

Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control.* New York: Freeman.

Beaudoin, M., & Desrichard, O. (2011). Are memory self-efficacy and memory performance related? A meta-analysis. *Psychological Bulletin, 137,* 211-241.

Broadbent, D. E., Cooper, P. F., FitzGerald, P., & Parkes, K. R. (1982). The Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) and its correlates. *British Journal of Clinical Psychology, 21,* 1-16.

Dixon, R. A., & Hultsch, D. F. (1983). Structure and development of the Metamemory in Adulthood scale. *Journal of Gerontology, 38,* 682-688.

Dixon, R. A., Hultsch, D. F., & Hertzog, C. (1988). The Metamemory in Adulthood (MIA) questionnaire. *Psychopharmacology Bulletin, 24,* 671-688.

Levinson, A. (1999). February 22. Two-time memory champion still lives by Post-its. *San Antonio Express-News.*

Metcalfe, J. (2017). Learning from errors. *Annual Review of Psychology, 68,* 465-489.

Metcalfe, J., & Xu, J. (2018). Learning from one's own errors and those of others. *Psychonomic Bulletin & Review, 25,* 402-408.

Miller, L. K. (1999). The savant syndrome: Intellectual impairment and exceptional skill. *Psychological Bulletin, 125,* 31-46.

Schacter, D. L. (2001). *The seven sins of memory: How the mind forgets and remembers.* New York: Houghton Mifflin.（シャクター, D. L. 春日井晶子（訳）(2002). なぜ「あれ」が思い出せなくなるのか－記憶と脳の７つの謎　日本経済新聞社）

清水寛之 (2019).　日常生活場面における認知的失敗傾向と記憶自己効力感の関係－認知的失敗質問紙（CFQ）と成人用メタ記憶尺度（MIA）の因子間の相関分析－　神戸学院大学心理学研究，*2*，21-29.

清水寛之 (2021).　記憶検査の成績予測の正確度と時間的展望の関係－改訂版ウエクスラー記憶検査（WMS-R）と時間的展望尺度（ZTPI）による検討－　神戸学院大学心理学研究，*4*，3-14.

清水寛之・高橋雅延・齊藤 智 (2006).　日常記憶に関する自己評価の分析－メタ記憶質問紙による検討－　心理学研究，*77*，366-371.

清水寛之・高橋雅延・齊藤 智 (2007).　メタ記憶質問紙を用いた日常記憶に関する自己評価－日常記憶質問紙，認知的失敗質問紙，及び記憶能力質問紙の標準データと因子構造－　人文学部紀要（神戸学院大学人文学部），*27*，143-166.

Takahashi, M., Shimizu, H., Saito, S., & Tomoyori, H. (2006). One percent ability and ninety-nine percent perspiration: A study of a Japanese memorist. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition, 32,* 1195-1200.

Wallace, J. C., Kass, S. J., & Stanny, C. J. (2002). The Cognitive Failures Questionnaire revisited: Dimensions and correlates. *Journal of General Psychology, 129,* 238-256

Wechsler, D.A. (1945). A standardized memory scale for clinical use. *Journal of Psychology, 19,* 87-95.

Wechsler, D.A. (1987). *Manual for the Wechsler Memory Scale-Revised.* New York: Psychological Corporation.

Wechsler, D.A. (1997). *Wechsler Memory Scale -Third Edition (WMS-III.) administration and scoring manual.* San Antonio, TX: Psychological Corporation.

Wechsler, D.A. (2009). *Wechsler Memory Scale - Fourth Edition (WMS-IV) technical and interpretative manual.* San Antonio, TX: Psychological Corporation.

Wechsler, D., & 杉下守弘 (2001).　日本版ウエクスラー記憶検査法（WMS-R）日本文化科学社

山田尚子 (1999).　失敗傾向質問紙の作成及び信頼性・妥当性の検討　教育心理学研究，*47*，501-510.

—2022.8.23 受稿　2022.11.21 受理—